

興來大澤野
擊斝

也續為其福
新州

國師
子
友
海
楚

世
乙
隣
于
止
夫
向

年
興
文
步
風
不
不

漱石全集
第七卷

三四郎

全三十四卷 第三回配本

昭和三十一年六月二十七日 第一刷發行 漱石全集 第七卷

定價百五十圓

著者 夏目漱石

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

發行者 岩波雄二郎

東京都青梅市根ヶ布三八五番地

印刷者 山田一雄

發行所 東京都千代田區 株式會社 岩波書店

神田一ツ橋二ノ三

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本

目次

三四郎

解説
注 解
説

三

二四三

二五三

三
四
郎

明治四一、九、一—四一、二二、二九

うとくとして眼が覺めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めてゐる。此爺さんは慥かに前の前の驛から乗った田舎者である。發車間際に頓狂な聲を出して、馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思つたら脊中に御灸の痕が一杯あつたので、三四郎の記憶に残つてゐる。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣りに腰を懸けた迄よく注意して見てゐた位である。

女とは京都からの相乗である。乗つた時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の

色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じてゐた。それで此女が車室に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は實際九州色であつた。

三輪田の御光さんと同じ色である。國を立つ間際迄は、御光さんは、うるさい女であつた。傍を離れるのが大いに難有かつた。けれども、斯うして見ると、御光さんの様なのも決して悪くはない。

唯顔立から云ふと、此女の方が餘程上等である。口に締りがある。眼が判明してゐる。額が御光さんの様にだゞつ廣くない。何となく好い心持に出來上つてゐる。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。時々女と自分の眼が行き中る事もあつた。爺さんが女の隣へ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。其時女はにこりと笑つて、さあ御掛けと云つて爺さんに席を

譲つてゐた。夫それからしばらくして、三四郎は眠くなつて寐そのて仕舞つたのである。

其寐そのてゐる間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。眼を開あけた三四郎は黙ふたりつて二人の話を聞いて居た。女はこんな事を云ふ。――

小供の玩具おもちゃは矢張廣島より京都の方が安くつて善いいものがある。京都で一寸用があつて下りた序ついでに、蝟藥たこやぐ師しの傍そばで玩具おもちゃを買つて來た。久し振で國へ歸つて小供に逢ふのは嬉しい。然しかし夫おつとの仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ歸るのだから心配だ。夫おつとは呉くれに居て長らく海軍の職工をして居たが戦争中は旅順りょじゆんの方に行つてゐた。戦争が濟んでから一旦いつたん歸つて來た。間もなくあつちの方が金が儲まうかると云つて、又大連へ出稼でかせぎに行つた。始めのうちは音信たよりもあり、月々のものも儿帳面ちやんくと送つて來たから好かつたが、此半歳許前このはんとしばかりから手紙も金かねも丸まるで來なくなつて仕舞つた。不實たな性質ちではな

いから、大丈夫だけれども、何時いつ迄も遊んで食べてゐる譯には行かないので、安否のわかる迄は仕方がないから、里へ歸つて待つてゐる積つもりだ。

爺さんは蝟藥師たこやぐしも知らず、玩具おもちゃにも興味がなと見えて、始めのうちは只ただはいくくと返事だけ丈してゐたが、旅順以後急に同情を催もよほして、それは大いに氣の毒だと云ひ出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうく彼地あつちで死んで仕舞しまつた。一體戦争は何の爲にするものだか解らない。後あとで景氣でも好くなればだが、大事だいじな子は殺される、物價ものしきは高くなる。こんな馬鹿氣ばかげたものはない。世の好いい時分に出稼でかせぎなど、云ふものはなかつた。みんな戦争の御蔭だ。何なにしろ信心が大切だ。生きて働いて居るに違ちがない。もう少し待つてゐれば屹きつ度歸つて來る。――爺さんはこんな事を云つて、頻しきりに女を慰めて居た。やがて汽車が留とどつたら、では御大おだい事じにと、女に挨拶あいさつをして元氣よく出て行つた。

爺さんに續いて下りたものが四人程あつたが、入れ易つて、乗つたのはたつた一人しかない。固から込み合つた客車でもなかつたのが、急に淋しくなつた。日の暮れた所爲かも知れない。驛夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の點いた洋燈を挿し込んで行く。三四郎は思ひ出した様に前の停車場で買つた辨當を食ひ出した。

車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸しの頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる。

女はやがて歸つて來た。今度は正面が見えた。三四郎の辨當はもう仕舞掛である。下を向いて一生懸命に箸を突ツ込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもま

だ元の席へ歸らないらしい。もしやと思つて、ひよいと眼を擧げて見ると矢張正面に立つてゐた。然し三四郎が眼を擧げると同時に女は動き出した。只三四郎の横を通つて、自分の座へ歸るべき所を、すぐと前へ來て、身體を横へ向けて、窓から首を出して、靜に外を眺め出した。風が強くあたつて、鬢がふわ／＼する所が三四郎の眼に這入つた。此時三四郎は空になつた辨當の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であつた。風に逆らつて抛げた折の蓋が白く舞戻つた様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと氣が付いて、不途女の顔を見た。顔は生憎列車の外に出てゐた。けれども女は靜かに首を引つ込めて更紗の手帛で額の所を丁寧拭き始めた。三四郎は兎も角も謝まる方が安全だと考へた。

「御免なさい」と云つた。

女は「いゝえ」と答へた。まだ顔を拭いてゐる。三

四郎は仕方なしに黙つて仕舞つた。女も黙つて仕舞つた。さうして又首を窓から出した。三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顔をしてゐる。口を利いてゐるものは誰もない。汽車丈が凄じい音を立て、行く。三四郎は眼を眠つた。

しばらくすると「名古屋はもう直でせうか」と云ふ女の聲がした。見ると何時の間にか向き直つて、及び腰になつて、顔を三四郎の傍迄持つて來てゐる。三四郎は驚いた。

「さうですな」と云つたが、始めて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「此分では後れますでせうか」

「後れるでせう」

「あんたも名古屋へ御下で……」

「はあ、下ります」

此汽車は名古屋留りであつた。會話は頗る平凡であ

つた。只女が三四郎の筋向ふに腰を掛けた許りである。それで、しばらくの間は又汽車の音丈になつて仕舞ふ。次の驛で汽車が留まつた時、女は漸く三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内して呉れと云ひだした。一人では氣味が悪いからと云つて、頻りに頼む。

三四郎も尤もだと思つた。けれども、さう快く引き受ける氣にもならなかつた。何しろ知らない女なんだから、頗る躊躇したにはしたが、斷然斷る勇氣も出なかつたので、まあ好い加減な生返事をして居た。其うち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋迄預けてあるから心配はない。三四郎は手頃なズツクの革靴と傘丈持つて改札場を出た。頭には高等學校の夏帽を被つてゐる。然し卒業したしるしに徽章丈は挽ぎ取つて仕舞つた。晝間見ると其處丈色が新しい。後から女が尾いて來る。三四郎は此帽子に對して少々極りが悪かつた。けれども尾いて來る

のだから仕方がない。女の方では、此帽子を無論たゞの汚ない帽子と思つてゐる。

九時半に着くべき汽車が四十分程後れたのだから、もう十時は過つてゐる。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口の様に賑やかだ。宿屋も眼の前に二三軒ある。たゞ三四郎にはちと立派過ぎる様に思はれた。そこで電氣燈の點いてゐる三階作りの前を澄して通り越して、ぶら／＼歩行いて行つた。無論不案内の土地だから何處へ出るか分らない。只暗い方へ行つた。女は何とも云はずに尾いて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿と云ふ看板が見えた。之は三四郎にも女にも相應な汚ない看板であつた。三四郎は鳥渡振返つて、一口女にどうですと相談したが、女は結構だといふんで、思ひ切つてずつと這入つた。上り口で二人連ではないと斷る筈の所を、入らつしやい、——どうぞ御上り——御案内——梅の四番杯とのべつ

に喋舌られたので、已を得ず無言の儘二人共梅の四番へ通されて仕舞つた。

下女が茶を持つてくる間二人はぼんやり向ひ合つて坐つてゐた。下女が茶を持つて来て、御風呂をと云つた時は、もう此婦人は自分の連ではないと斷る丈の勇氣が出なかつた。そこで手拭をぶら下げて、御先へと挨拶をして、風呂場へ出て行つた。風呂場は廊下の突き當りで便所の隣にあつた。薄暗くつて、大分不潔の様子である。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考へた。こいつは厄介だとぢやぶ／＼遣つてゐると、廊下に足音がする。誰か便所へ這入つた様子である。やがて出て來た。手を洗ふ。それが濟んだら、ぎいと風呂場の戸を半分開けた。例の女が入口から、「ちいと流しませうか」と聞いた。三四郎は大きな聲で、

「いえ澤山です」と斷つた。然し女は出て行かない。

却つて這入つて來た。さうして帶を解き出した。三四郎と一所に湯を使ふ氣と見える。別に恥かしい様子も見えない。三四郎は忽ち湯槽を飛び出した。そこく、に身體を拭いて座敷へ歸つて、座蒲團の上に坐つて、少からず驚いてゐると、下女が宿帳を持つて來た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡縣京都郡眞崎村小川三四郎二十三年學生と正直に書いたが、女の所へ行つて全く困つて仕舞つた。湯から出る迄待つて居れば好かつたと思つたが、仕方がない。下女がちやんと控へてゐる。已を得ず同縣同郡同村同姓花二十三年と出鱈目を書いて渡した。さうして頻りに團扇を使つてゐた。

やがて女は歸つて來た。「どうも、失禮致しました」と云つてゐる。三四郎は「いゝや」と答へた。

三四郎は革鞆の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書く事も何もない。女がゐなければ書く事が

澤山ある様に思はれた。すると女は「一寸出て参ります」と云つて部屋を出て行つた。三四郎は益々日記が書けなくなつた。何處へ行つたらうと考へ出した。

そこへ下女が床を延べに來る。廣い蒲團を一枚しか持つて來ないから、床は二つ敷かなくては不可なりと云ふと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか云つて埒が明かない。面倒がる様にも見える。仕舞には只今番頭が一寸出ましたから、歸つたら聞いて持つて参りませうと云つて、頑固に一枚の蒲團を蚊帳一杯に敷いて出て行つた。

夫から、しばらくすると女が歸つて來た。どうも遅くなりましてと云ふ。蚊帳の影で何かしてゐるうちに、がらんぐといふ音がした。小供に見舞の玩具が鳴つたに違ない。女はやがて風呂敷包を元の通りに結んだと見える。蚊帳の向ふで「御先へ」と云ふ聲がした。

三四郎はたゞ「はあ」と答へた儘で、敷居に尻を乗せ

て、團扇うちばを使つてゐた。いつそ此儘このまゝで夜を明かして仕舞はうかとも思つた。けれども蚊あぶがぶん／＼来る。外そとではとても凌しのぎ切れない。三四郎はついと立つて、革靴かばんの中から、キヤラコの襯衣しやつと洋袴ざぼん下を出して、それを素肌すはだへ着けて、其上から紺こんの兵兒帶へこおびを締めた。それから西洋手拭タウエルを二筋持つた儘蚊帳まの中へ這入つた。女は蒲團わかふの向の隅でまだ團扇うちばを動かしてゐる。

「失禮しつれいですが、私は疝性かんしやうで他人の蒲團わかふに寝るのが嫌いやだから……少し蚤除のみよけの工夫を遣るから御免ごめんなさい」

三四郎はこんな事を云つて、あらかじめ、敷いてある敷布シートの餘つてゐる端はじを女の寐ねてゐる方へ向けてぐる／＼捲まき出した。さうして蒲團わかふの真中に白い長い仕切しきりを拵こしらへた。女は向むかへ寝返りを打つた。三四郎は西洋手タウエル拭ふを廣げて、これを自分の領分に二枚續きに長く敷いて、其上に細長く寝た。其晩は三四郎の手も足も此幅このあの狭い西洋手拭タウエルの外そとには一寸すんも出なかつた。女とは一ひと

言も口を利かなかつた。女も壁を向いた儘凝じつとして動かなかつた。

夜はやう／＼明けた。顔を洗つて膳ぜんに向つた時、女はにこりと笑つて、「昨夜ゆうべは蚤のみは出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「え、難有ありがたう、御蔭おかげさまで」と云ふ様な事を眞面目まじめに答へながら、下を向いて、御猪口おちよくの葡萄豆ぶどうまめをしきりに突つつき出した。

勘定かんぢやうをして宿を出て、停車場ステーションへ着いた時、女は始めて關西線よつかいで四日市よひちの方へ行くのだと云ふ事を三四郎に話した。三四郎の汽車は間もなく來た。時間の都合で女は少し待合はせる事となつた。改札場きさばの際迄送つて來た女は、

「色々御厄ごやく介けいになりました、……では御機嫌ごきげんよう」と丁寧ていねいに御辭儀ごしげいをした。三四郎は革靴かばんと傘かさを片手に持つた儘、空いた手で例の古帽子ふるぼうしを取つて、只一言ただひとこと、

「左様さやうなら」と云つた。女は其顔そのかほを凝じつと眺ながめてゐた、

が、やがて落付いた調子で、

「あなたは餘つ程度胸のない方ですな」と云つて、にやりと笑つた。三四郎はブラツト、フオームの上へ弾き出された様な心持がした。車の中へ這入つたら兩方の耳が一層熱り出した。しばらくは凝つと小さくなつてゐた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果から果迄響き渡つた。列車は動き出す。三四郎はそつと窓から首を出した。女はとくの昔に何處かへ行つて仕舞つた。大きな時計ばかりが眼に着いた。三四郎は又そつと自分の席に歸つた。乗合は大分居る。けれども三四郎の舉動に注意する様なものは一人もない。只筋向ふに坐つた男が、自分の席に歸る三四郎を一寸見た。三四郎は此男に見られた時、何となく極りが悪かつた。本でも讀んで氣を紛らかさうと思つて、革靴を開けて見ると、昨夜の西洋手拭が、上の所にぎつしり詰つてゐる。そいつを傍へ掻き寄せて、底の方から、手

に障つた奴を何でも構はず引出すと、讀んでも解らないペーコンの論文集が出た。ペーコンには氣の毒な位薄つぺらな粗末な假綴である。元來汽車の中で讀む見もないものを、大きな行李に入れ損なつたから、片付ける序に提革靴の底へ、外の二三冊と一所に放り込んで置いたのが、運悪く當選したのである。三四郎はペーコンの廿三頁を開いた。他の本でも讀めさうにはない。ましてペーコン杯は無論讀む氣にならない。けれども三四郎は恭しく廿三頁を開いて、萬遍なく頁全體を見廻してゐた。三四郎は廿三頁の前で一應昨夜の御浚をする氣である。

元來あの女は何だらう。あんな女が世の中に居るものだらうか。女と云ふものは、あゝ落付いて平氣でゐられるものだらうか。無教育なのだらうか、大膽なのだらうか。それとも無邪氣なのだらうか。要するに行ける所迄行つて見なかつたから、見當が付かない。思

ひ切つてもう少し行つて見ると可かつた。けれども恐ろしい。別れ際にあなたは度胸のない方だと云はれた時には、喫驚した。二十三年の弱點が一度に露見した様な心持であつた。親でもあゝ旨く言ひ中てるものではない。……

三四郎は此處迄来て、更に悄然して仕舞つた。何處の馬の骨だか分らないものに、頭の上がらない位打された様な氣がした。ベーコンの二十三頁に對しても甚だ申譯がない位に感じた。

どうも、あゝ狼狽しちや駄目だ。學問も大學生もあつたものぢやない。甚だ人格に關係してくる。もう少しは仕様があつたらう。けれども相手が何時でもあゝ出るとすると、教育を受けた自分には、あれより外に受け様がないとも思はれる。すると無暗に女に近付いてはならないと云ふ譯になる。何だか意氣地がない。非常に窮屈だ。丸で不具にでも生れたやうなものであ

る。けれども……

三四郎は急に氣を易へて、別の世界の事を思出した。——是から東京に行く。大學に這入る。有名な學者に接觸する。趣味品性の具つた學生と交際する。圖書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。と云ふ様な未來をだらしなく考へて、大に元氣を回復して見ると、別に二十三頁の中に顔を埋めてゐる必要がなくなつた。そこでひよいと頭を上げた。すると筋向ふにゐたさつききの男がまた三四郎の方を見てゐた。今度は三四郎の方でも此男を見返した。

鬚を濃く生してゐる。面長の瘡ぎすの、どことなく神主じみた男であつた。たゞ鼻筋が眞直に通つてゐる所丈が西洋らしい。學校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。男は白地の緋の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いてゐた。此服裝から推して、三四郎は先方を中學校の教